

大陸（南支）

衛生兵として

南支・中支の戦闘

愛知県 木村 利行

大正十（一九二一）年八月十九日、名古屋生まれの名古屋育ち、父母、男兄弟五人、七人家族の長男として生まれる。学校を卒業して印刷工場にいて、途中から三菱の航空機製造の会社に徴用になった。この工場は、戦争後期、爆撃で徹底的という程の被害を受けている。

徴兵検査は、昭和十六（一九四一）年六月頃であったと思う。検査の結果は第三乙種で、後に第

二乙種になった。私は、航空機製造に従事していたため召集令状を貰ってからも半年近く会社で働いていた。白紙召集であったからか。臨時（充員召集ではなく）召集ではなく、教育召集令状であった。

当時、昭和十六年十二月八日に大東亜戦争が勃発し、昭和十七年一月、三菱で働いている時だった。検査の時は、バラバラに集まって何人位が現役兵（甲種、第一乙種）だったかは勿論判らなかつた。大東亜戦争が始まって半年位だが、教育召集令状を持って静岡の歩兵第三十四連隊留守隊へ入隊した。第三乙種が第二乙種に昇格し、入隊となったのである。

兵隊としての歩兵教育は受けたが、一期の検閲

というのは無かった。基礎的教育を受けた後、静岡の留守隊から、突然、名古屋陸軍病院に行くことになって、衛生兵の教育を受けた。そして野戦へ行くことになった。たしか、昭和十七年五月だと思う。衛生兵教育を受けた者は四十人位いたと思う。

戦争が始まって半年位の時だったのだが、即日帰郷により帰った者が四十人位いたというが、歓呼の声で送られたのに、おめおめ帰らなければならぬ人のことを思うと複雑な気持ちであった。

一緒に入隊した仲間は随分いたが、今は、名古屋に一人いる程度で淋しいかぎりである。

内地出発は広島から宇品で乗船。たしか三千トン位の輸送船だと聞いている。着いた所は、南支那広東の港黄甫である。部隊は第百四師団（鳳兵団）で本部は広州市の中山大学にあり、その患者収容隊で現地教育を受けた。

師団が野戦病院を開設したのだが、我々は初年

兵（その時は二等兵で、教育中に一等兵になった）だから、雑務のようなもの手伝いのようなことをしていた。それも教育なのであった。

源潭墟作戦という戦闘に参加したが、何しろ初めてのことですから戦傷者が随分出た。初陣ですから、その戦傷者の患者の傷口の大きいのにびっくりした。今でも、その時の戦友とは付き合っている。

口の中に弾丸が通った者もいたし、随分ひどい者もいた。包帯をきちつと巻いて、上等兵が負傷者にどこの中隊かを聞く。治療をしているうちに、気を失ってしまうような負傷者もいる。盲貫銃創など、軍医さんも気が立っているためか、患者さんを気強くさせるためか、怒鳴るのだ。私なども、いろいろなことをやってきた。この作戦は初めてのことで、戦闘の様子も知る良い経験だった。

また、作戦ではよく歩いた。夜も寝ずに、眠りながら歩いたこともあった。随分患者も来たし、

暑かった。手当をし後方に送るのだが、どの位死んだか判らない。作戦中、戦闘は前線でやってい
るのだが、周囲が生臭いというか、酸っぱいとい
うか、そんなような感じがした。治療室は、こん
な、いろいろな思いがある。

その作戦は十月か、十一月頃だったが、バコウ
という所から出発し、その後、部隊へ帰った。そ
して、また前線へ行った。その後、私は、患者収
容隊から病院勤務となった。戦闘の負傷者を送方
(病院等)送るから、病院の仕事が忙しくなるか
らである。

中国軍(蒋介石軍)の司令官は余漢謀將軍で
あった。我が師団の司令部のあった白雲山の所は
良い所だった。私達は、昭和十八年九月頃だつた
と思うが香港にしばらくいたり、バイヤス湾(日
本軍が広東攻略の時上陸した所)の方へ船で行つ
たこともあった。その頃になると、だんだんと空
襲も多くなつた。広東市内においては既に、昭和

十八年五月八日大空襲があり、一般市民の被害は
尽大であつたと聞く。

空襲の被害はだんだんと大になり、軍において
も作戦時には戦死・傷者が多くなる。我々の鳳兵
団(百四師団)の第三野戦病院は中山大学で解散
し、半分は第四野戦病院に吸収されている。

我々は第六十五師団(専部隊)に転属となり、
私は結局、専部隊の野戦病院(専第七九九部)
ではなく、隊付となり、結局、第六十五師団輜
重^{ちよう}隊転属となった。

部隊は中支軍である(第十三軍)。そのため広
州市市街の黄甫港から上海の外港・呉淞港に上
陸、鉄道に乗った。列車は部隊所在の駅に停車、
転属者は列車を降りて、それぞれの部隊へ入つ
た。私は最終まで列車に乗り、中支の北部か徐州
で、同行の仲間五人で下車した。私は列車移動の
間、栄養失調となり、有蓋貨車での移動、転属で
した。結局、転属者は最後まで無蓋貨車でしたの

に、私はそうでなかったたので助かったわけである。

下車すると担架に担がれ、自動車に乗せられ、部隊に到着した。軍医さんは、そんな者は「寝かせておけば癒る」と言つて、神経痛の注射を打つたら、何だか熱が下がった。そして、そんな位なら作戦に行けるのじゃないかと言われた。暫くして、その後の作戦には参加した。山東省作戦だった。そんなことを覚えている。

私は、専部隊の輜重、自動車隊所屬の衛生兵となったのである。師団輜重隊は第一中隊が挽馬隊、第二・第三中隊が自動車部隊であつたが、それに第四中隊ができた。南京の手前あたりと記憶するがこの時には作戦は多かつた。

この間、本科兵の補充はあつたが、衛生兵の補充は無かつた。昭和二十年になって、朝鮮の幹部候補生四十六人が配属になつた。皆、学校出の者ばかりで見習士官になつた。

第二次温州作戦のことを話す。

温州は中支、浙江省（南部）東支那海沿岸の街である。

昭和十九年七月、サイパン、テニアン島（日本の委任統治地）等が玉砕して東条内閣は総辞職し、次は、台湾か沖繩かという極めて緊迫した戦況になつてきた。そのようなことを、我々兵隊には余りよく知らせなかつたのは防諜上からも当然であつたろう。

軍は、そのため沖繩・台湾の対岸にある中国の温州を攻略するという作戦が行われた。

先程申したように私達は、南支第四百師団（鳳）兵団であつたのが、南支軍から中支軍の専部隊（第六十五師団）の野戦病院に転属した理由が今になつて判つたような気がする。

そのため、我々は鳳師団の野戦病院から、中支（第十三軍）の野戦病院に転属になつたのである。ところが、私は野戦病院でなく、一般部隊たる第六十五師団の輜重兵隊に転属を命ぜられたのであ

る。であるから、野戦病院の衛生兵から、一般部隊の衛生兵になったのである。我々の仲間の多くは病院勤務であるのに、何か変な気持ちになったが、軍隊は、その命令に従って勤めなくてはならない。

我々の部隊は浙贛線の浙江省中部、杭州南方の金華という所に行った。広東市から見れば田舎みたいな所ですが、美しい河が流れていて立派な街です。そこに独逸人技師が作ったという立派な橋が架っていた。

この作戦を含めても、随分長距離を歩いたものです。南支那から中支東部ですから、しかも、戦争をしながら、武器弾薬を担いで歩く。先程もお話したが、どの位歩いたかと言われても、その数字が出ない程です。

私は静岡から南支へ行き、馴れた広東から北へ行ったが、中支もなかなか良い所でした。しかし、南支は一年中、木の葉は緑だったが、北の方へ行くに従い禿山が多くあり、特に冬になれば

黄・褐色になるし、禿山も多い。広西へ行くと岩山である。

終戦時、第四中隊は船に乗っていたが、氣候が悪く、敵機が来る。兵隊は下痢をする。その上状況も悪い（敵襲や住民の不協力）。私の駐屯地は塩がなく、その取り方（製造法）が我々と違っていた。カマス（吠）の中に海水を入れ、塩を滲みこませて吠をはたいて塩を取り出す。こんな方法もあるのかと感心したものである。

本部にいと衛生兵は大切にされるが、各中隊毎の作戦・討伐には参加させられる。駐屯中は雑務をやらせられる。また、中隊長や中隊指揮班と一緒にいたりする。

空襲の話をしする。空襲の時、先に偵察機が来て、我々が岩かげに隠れていると、今度は戦闘機のP51が来て銃撃してくる。だが軽爆撃機の双発B25は余り来なかったが、日本の高射砲の弾が届かず、花火みたいに、敵機の下で破裂し、機

体まで届かない。戦況を見ている我々は歯を喰いしばって残念がったことも多かった。空襲では軍馬も随分やられた。我々輜重隊も、馬は一個中隊だが、山岳戦では自動車は使えない。従って馬は重要な馬器馬匹であった。

浙江省、杭州南方の金華で初年兵が補充になったが、補充部隊は兵器を持っていない。帯革は本革でなく、ベルトのようなものであったりした。また、帯剣の鞘も金属でなく竹であったりした。それを見て「内地も物資が無いなあ！」ということが判った。

患者は皆野戦病院に行ったが、我々は病院で原子爆弾（広島）のことを聞いたが、初めは特殊爆弾という名で発表になった。ソ連の参戦を聞いて、これはエライことになったなあと話をしてきた。街の紙幣の値段（軍票の儲備券）も下がってきた。中国人は経済には敏感だから、日本の旗色が悪くなったのを見て、日本軍の貨幣の価値が下がるのを目の当たりに見たのである。物を買うの

に、例えば一円とすると、十日前には十個の物が買えたが、五日前、今日となると、五個になり、三個しか買えなくなる。しかし、月日が経つと、三個が五個買えると、日によって価値が上下することもあった。そんな体験をしながら、自主抑留の生活をしていた。

また、人間の性格も同じように、月日が経過すると変わることも知った。敗戦という体験を、日本内地ではなく中国の戦地において味わったのだが、戦争が人間を変える。高等教育を受けた筈の軍医が、感情によって部下を叩くことも見た。あるいは軍紀（軍の規律）を守るために行うこともあったと思うが、感情でそのようなことをした人もあったろう。

私は特に戦地で衛生兵という立場で勤務をしたから、医薬品なども、住民の宣撫に役立ったり、戦友を助けたり、古兵が頭を下げたり、特殊な存在であったことも事実でしょう。

私は前に話したように、南支の野戦病院から他部隊に転属になり、野戦病院から一般部隊（輜重隊）の隊付きになったりし、他の人にはできなかった体験をしたのである。しかし、作戦や戦闘がどのようなにして展開したのかは判らなかつた。

戦争が終わつて五十余年の今日、第六十五師団野戦病院戦友会の「戦友会報」を送ってもらい、その中に、第二次温州作戦について、岩田氏が書いた文を見て、私の知らなかつたことを知ることができたので、その一部を借りて申し述べます。

第六十五師団野戦病院の二半部は、第二次温州作戦に出動、杭州では独立混成第八十六旅団野戦病院として再編され温州に移駐、温州野戦病院として再編され温州に移駐、温州野戦病院を開設した。と書かれている。

我々の目的地温州は沖繩の対岸にあり、いつ、米軍が上陸してくるかも知れない要衝である。この温州に先制攻撃をかけ我が軍の飛行場を建設す

るといのが、第二次温州作戦であつた。

我々、第六十五師団（専部隊）の二半部は貴志軍医大尉を長として七月十日徐州を出発し、七月二十五日浙江省杭州に到着した。

私たち兵隊には何も知らされず、非常呼集で叩き起こされ、夜行軍で、ある駅から貨車に乗せられて、南京郊外から温州作戦に参加させられたのである。後日独立混成第八十六旅団型岡部隊の野戦病院として再編されたことを知らされた。

友軍部隊は内陸部を大きく迂回し浙江省金華に入った模様である。

温州に向かう我々の行く先には地雷が埋設されていた。尖兵隊は電波探知機を使って埋没位置を捜し、地面に大きく丸を描いて、後続の部隊に知らせながら更に進む。

時々、山あいから重機関銃の攻撃を受けたり、迫撃砲の砲撃を受けた。山岳地帯の道はいよいよ狭く、険しく患者の護送は困難を極めた。

連日の猛暑は岩をも溶かすかとも思われた程

だった。兵隊の顔は、もう汗も出ず、塩が噴き、ザラザラの顔ばかりだ。眼ばかりが異様に光っている。暑さを避け、日中は谷間の山中に休む。谷間の安全な場所ですぐ小休止だ。

以上、作戦行軍の状況をよく描写している。

その後、岩田氏は負傷している。

私は、その頃は、野戦病院の衛生兵でなく、第六十五師団（専部隊）輜重隊の隊付衛生兵であったから、野戦での様子はまさに「その通り」であった。

下士候で頑張る

南支独立大隊

福岡県 八山 千萬多

父は明治三十七（一九〇四）、八年の戦役、日露戦争で、功七級金鷄勲章を賜り、その時の隊長

の名、片倉千萬喜の名を受けて、私に「千萬多」と名付けられたという。兄弟は男のみ九人で、その七男だったので、父は「お前達は軍隊へ行け」と言っていた。親としては、男の児を沢山持ったので「国の為に軍人になれ」と言っていたのであろう。

生家は代々農業で、農地が多くなければ生計が立てられぬので、農地を開拓した。当時福岡には「土地利用」のための補助金があり、それを受けて現在では、組合員二十人で約二〇町歩を経営している。そのうち県と町から二分の一、自己資本二分の一で、大農経営となっている。組合は、昭和二十五（一九五〇）年に始めたが、その前は個人経営だったので、一家は皆働いた。

私は大正十一（一九二二）年十一月一日生まれなので、昭和十八年四月十日、小倉の西部第四十六部隊に入営し、約二カ月教育を受け、南支派遣軍の要員として外地に出発、昭和十八年六月、広